

# 小笠原諸島に見られる旧南洋庁地域の言語的影響

ダニエル・ロング

## 1. はじめに

明治時代から20世紀の半ばにかけて、日本が近海の太平洋諸島へと勢力を伸ばした。その際、地理的にも文化的にも日本本土とミクロネシアとの中間に位置する小笠原諸島が中継地点としての役割を果たしていた（ロング2000）。本稿で小笠原諸島と旧南洋庁との言語的共通点を概説し、「言語交流」の類型を試みる。まず小笠原とマリアナ諸島の共通点として、両地域に取り残されている、日本本土で使われなくなった単語の使用があげられる。日本本土ではカンザシ（簪）やサルマタ、乳バンドなどは対象物そのものの変化とともに外来語にすり替えられ、ゴフジョ（御不浄）やイジン（異人）、ナイチ（内地）、ハラメ（孕女）は社会的意識の変化とともに語感が悪化し、新語に置き換えられた。一方、太平洋諸島起源の単語が見られ、ハワイ語のタマナ（テリハボク）やカナカ（太平洋諸島民）、チャモロ語のカンコン（朝顔菜）、クイリー（魚のミナミイスマズミ）、シーカンバ（葛芋）、タガンタガン（銀合歡）などは小笠原に一旦入ってから、一般の日本語あるいは南洋群島全域に広がったのである。なお、小笠原と同様、南洋群島にも八丈島民が大量に入植したが、後者への言語的影響は「オジャレ」（いらっしゃい）のような標語ぐらいにしか見られない。

## 2. 小笠原と旧南洋庁に残存する古い日本語（周圏論と植民地遅延現象）

柳田國男が指摘した「周圏分布」とは、文化的中心でどんどん新しいものが生まれ、周辺へと伝わっていき（伝播し）、古いものが中心から離れたところに取り残されるという現象である。柳田が周圏論を適用したのは日本本土地域であるが、同じ現象が小笠原諸島や南洋庁（さらにはハワイなど）で使われる日本語にも見られる。日本語の「中心」に当たる本土（内地）で新しい言い方が生まれてもそれが「周辺」である小笠原やマリアナ諸島には届かず、古い単語が取り残される状況が見られる。

似たような現象が英語圏にあることを指摘したイギリスの社会言語学者トラッドギルがそれをコロニアル・ラグ（Colonial Lag = 植民地遅延）と名づけた（Trudgill 2004）。ハワイの日本語ではカメラのことを「写真機」と言ったりするような現象がこれにあたる。また、沖縄本島の若年層どころか中年層も伝統方言が話せなくなっているのに、南米の沖縄系移民コミュニティに育った二世や三世の若者が（標準日本語が話せないのに）方言を聞いて分かる「消極的バイリンガル」になっている現象もこれに相当する。

具体例を見よう。まず、本土で消えているのに小笠原で日常的に使われ続けている単語で最も目立つのは「ナイチ」という単語であろう。これは「内地」であり、戦前に「外地」（植民地）

と区別されていたが、現在も沖縄や北海道、小笠原などではごく普通に使用され続けている言い方である。なお、沖縄では「内地」よりも「本土」の方をよく耳にするが、小笠原は反対に「本土」ということばが（内地から来た人の中で使われるにしても）島の人の間ではほとんど聞かない。しかし、小笠原は日常会話だけではなく、郵便局のような公なところでも、しかも書き言葉として、使用される点が特徴的と言える（図1）。

これ以外に「カメ」（瓶子、甕）が聞かれる。こうした「物の名称」の場合には、単語そのものの使われなくなる（廃語）とそれが表す対象物が廃れていく（廃物）問題は密接に絡み合っている（高橋1985）。小笠原における「カメ」の使用は純粋に単語だけの残存とは言えないが、少なくとも言えることは、この単語を現在の内地で耳にすることはほとんどないのに対し、小笠原ではまだ日常的に聞くことがある、ということである。「カンザシ」（簪）は現在の内地では、和服の時に髪に刺す長いピンを指し示す言い方として使われるが、小笠原のように日常的に使われるものをむしろ、現在の内地ではヘアピンと称するのが普通と言えよう。

「ゴフジョ」（御不浄）も小笠原で生き残っている内地の死語と言える。この単語の場合は「廃物廃語」（排泄物を出す場所がなくなっていない）というよりは、美語・丁寧語の「陥没穴」とでも呼ぶべき現象に当たる。著者がこう名付けたのは、「排泄物を出す場所」を意味する単語は使われているうちにレベルが落ち、イメージが汚くなり使えなくなる。その結果語彙体系に空白ができる。その穴を埋めるように、新名称が誕生するが、それも次第にレベルが落ち、語彙体系に、埋めても埋めても開いてしまう「陥没穴」ができるのである。井上史雄（1999：79）の言う「インフレ」に類似する現象である。名称はともあれ、広く知られているこの現象では綺麗な響きを持っている単語が使われているうちに、段々と響きが悪くなりレベルが下がっていく。廁かわやが使われているうちに、響きが悪くなり、語彙体系にぽっかり空いた空白を埋めるように、「はばかり」や「手水ちようず」が綺麗なことばとして一般化するものの、時間とともにそれらのレベルも落ち、穴埋めに「御不浄」が誕生した。しかし、これも（内地では）次第にイメージが落ち、戦後に「お手洗い」や「トイレ」に取って代わられた。一方、小笠原は戦後に日本から引き離されて米軍の統治下に置かれることで日本本土との行き来やコミュニケーションが途絶えた。そのため、ここで紹介している単語の使用を含めて、小笠原の日本語は戦前のままで時間が止まっているのである。そして、1968年の返還のさいに、浦島太郎のように、「戦後の日本語」へとタイムスリップしたわけである。

妊婦を指す「ハラメ」（孕女）や帽子の一種である「チャッポ」（内地ではシャッポ）、または欧米系島民を指す「イジン」（異人）とその派生語「イジンドーナツ」（サーターアンダギーに似た甘い揚げパン）や「イジンモモ（グアバ、キバンジロウ）」にも古めかしい響きがある。

小笠原はいまだに「カッター」という単語が欧米系の日本語で使われている。これは「活動



図1 内地行き郵便物の締め切り時刻を告げる郵便局の貼り紙

写真」（映画、映画館）を省略したものである。『小笠原ことばしゃべる辞典』にも自然会話から取った使用例（1）が載っている。なお、「ジャ」は八丈語起源の文末詞である。（以下、『小笠原ことばしゃべる辞典』の使用例の後に話者の頭文字を記す。詳細に関しては辞書を参照されたい。）

1. 「カッドー」つってたじゃ。「カッドー行こう！」つって。movie 行こうって。（MKS）

サイパンの現地語の一つであるチャモロ語にも、日本語起源の借用語 *kachido*（映画）が見られるし、ヤップ語でも *kaechiidoo*（映画）が使われる。パラオ語辞典には *katsudo*（映画）以外にも *katsudokang*（映画館）や複合語の *mesil er a katsudo*（映画投影機）、さらに動詞の *oukatsudo*（映画館を経営する）が掲載されており、この単語がパラオ語に根付いていることを示唆しているのである。サイパンのカロリン語辞典にも *katsido* が載っている。ポナペ語でも *kasdo* という形でこの単語が借用されている。

サルマタ（猿股）は、単語も物も内地の日常生活から消えつつあるのだが、小笠原ではまだ使われているのである。『小笠原ことばしゃべる辞典』にもこの事実を語っている例文（2）が掲載されている。

2. ズロースとチチバンドとサルマタ。今も言うじゃ？（ISL）

この自然会話例に出てくる「ズロース」と「チチバンド」も現代の内地では聞かない単語である。しかし、これらも旧南洋庁各地の言語に借用語という形で残っているのである。例えば、チャモロ語の *saromata*、パラオ語やトラック語の *sarumata*、ヤップ語の *saarumataa*、ポナペ語の *sarmada*、コソラエ語の *sarmuhta* などにその姿が見られる。なお、いくつかの言語において、男女両方の「下着」の意味へと拡大したり（ヤップ語）、女性のみの下着を意味する単語に変化したり（チャモロ語）しているのである。チチバンドもパラオ語の *tsisibando* やポナペ語の *sispando* などに当該地域の多くの言語に残っているのである。

### 3. 小笠原と旧南洋庁に伝わった八丈語

現在も小笠原と旧南洋庁地域をむすんでいることのの一つは八丈との関係である。

八丈方言に非常に発達した敬語体系があることは言語学者の間でよく周知されているのである。小笠原にはこうした敬語が生産的かつ体系的なものとしては残っていないが、現在の欧米系はいくつの決まった表現を知っているのである。以下の文は『小笠原ことばしゃべる辞典』に載っているが、昔の八丈系島民の人々が使っていたことばを思い出しながら欧米系島民が演じたものである。

3. 「チャーさん、オジャッター、tea でもあがってゴジャレー」「おー、オジャルワヨイ」（MI）
4. 「チャーさん、三時ですよー。オジャッター。カンモでも上がってゴジャレー」（MI）

一方、旧南洋庁地域には八丈島方言の敬語体系は見られない。パラオ語には日本語起源の借用語が大量に入っているが、ほとんどは内容形態素である。なお一つおもしろい例外がある。昭和16(1941)年7月に出た「パラオ恋しや」という歌謡曲には「おじゃれ」という八丈系の敬語が入っていた(表1)。

表1 「パラオ恋しや」の歌詞

「パラオ恋しや」 森地一夫作詞／上原げんと作曲／岡春夫唄 海で暮らすなら パラオ島におじゃれ 北はマリアナ南はボナペ 島の夜風に椰子の葉揺れて 若いダイバーの舟唄洩れる 島へ来たなら ダイバー船へお乗り 男冥利 <sup>みょうり</sup> に命を賭けて 珊瑚林に真珠採りするよ ダイバー愛しの鼻唄歌うとて 波のうねりに 度胸が据わりゃ 海は故郷パラオの王者 アンカー下ろしてランタン振って 帰るダイバーは人気者
---

小笠原には浅沼など八丈系の名字は多いが、パラオへ行っても図2(“M. Asanuma Ent. Since 1949”)のような看板が目立つ。現在この「浅沼商業」を率いるSanty Asanuma氏は八丈島系商人の孫に当たる者で、かつてパラオ国会の上院議員を務めた人である。



図2 パラオのアサヌマ商業

#### 4. 小笠原からパラオに伝わったハワイ語

旧南洋庁地域（および沖縄）に伝わったハワイ起源の単語がある。意外に思われるかもしれないが、それが伝播したルートは小笠原である。

ハワイには *tamani* という木がある。同じ木は小笠原とパラオの両方でタマナ (*tamana*) と呼ばれている。パラオで言う *tamana* (図3) は小笠原で言うタマナは同じ木（あるいは極めて近い種）に思われる。



図3 パラオの *tamana* の木の葉と実

ハワイ語では [k] と [t] は元々同一音素で、方言によって異なる、あるいは同一の音素の異音として同一方言内で自由変異として表れるのである。歴史的には [t] が古く、変異的状况を経て、徐々に [k] へ変化していった。現在のハワイ語の事実上の標準では [t] ではなく [k] が使用されているので、ハワイ語の辞典類では *kamani* として載っている。

この木の標準和名が「テリハボク」（オトギリソウ科）で、学名が *Calophyllum inophyllum* であり、英語圏では *Alexandrian laurel*, *tamanu*, *beauty leaf*, *mast wood* などと呼ばれている。広域分布種であるこの木は小笠原など太平洋に広く分布している。パラオ語はハワイ語と同じオーストロネシア語族の言語であるが、ハワイ語は東マレー・ポリネシア語派に属するのに対し、パラオ語はオーストロネシア語族という大くりの中の孤立言語である。言ってみれば英語とアルバニア語と同じくらい言語的相違が大きい。従って、同語族だから同じ単語になったというわけではない。パラオ語辞典では、この木の名前が *btaches* となっている。パラオの高年層島民に確認したところ「通称はタマナだが、それはパラオ語の伝統的な名前ではなく、近代になって入った言い方だ」と言う。何語かと尋ねると「日本語ではないかしら」と答えた。念のために、この木の名称を太平洋地域の言語で調べた結果は次の通りである。（パラオに近い順番で）ヤップ：*biyuch*, グアム、北マリアナ諸島：*daog, daok*, トラック：*rakich*, ポナペ：*isou*, コソラエ：*eet*, マーシャル諸島：*lueg*, キリバス：*te itai*, クック諸島、タヒチ、マルケサス諸島：*tamanu*。すなわち、19世紀から20世紀にかけてパラオと関係の深いスペインの旧植民地や日本の旧南洋地域を見ても、現在パラオで使われている *tamana* に近い言い方は見られない。類似しているのはハワイなど遠く離れ、しかも歴史的に関係の浅いポリネシア文化圏のみである。そこでハワイ語からパラオ語への伝播ルートとして小笠原経由の仮説と直接伝播の仮説が立てられる（表2）。しかし、直接伝播説には問題がある。一つはこれまでに述べたように、ハワイとパラオとの距離が長くて、これまで歴史的に関わりをもっていない点にある。もう一つは、説明できない音変化（あるいは音対応）である。ハワイ語やタヒチ語は *tamani* や *tamanu* であるが、小笠原とパラオの両方にあるのは *tamana* という発音である。小笠原の場合においてもなぜこの [i] → [a] の母音変化が起きたか分からないが、起きたのは事実である。一方、必然性のないこうした音変化がパラオ語にも見られるが、偶然の一致とは考えにくい。やはり、パラオ

語の *tamana* は小笠原を経由して入ってきたと考えるのが自然であろう。

表2 伝播ルートの2つの可能性

仮説 A：小笠原経由	仮説 B：直接伝播
ハワイ語 k/ <i>tamani</i>	ハワイ語 k/ <i>tamani</i>
↓	↓
小笠原 <i>tamana</i>	↓
↓	↓
パラオ <i>tamana</i>	パラオ <i>tamana</i>

なお、小笠原ではタマナの当て字として「玉名」が使われたこともある。これは本当の語源ではないが、この発想から生まれた民間語源説がある。『小笠原ことばしゃべる辞典』の自然会話使用例にタマナに関する情報が見られる (5, 6)。

5. タマナの木は丸いよ実がね、まんまる。モモタマナはこう round。タマナの木は hard wood よ、make table, big tree だから。(JG)
6. だから兄島にある Tamana Beach もそう。それ(木)がいっぱいあるから。Tamana Beach ってあるでしょう？ あそこ、タマナの木いっぱいあるんですよ。(MI)

パラオではこの木の実の子供におはじきのビー玉として利用されたので、なおさら「玉」への連想が強いと思われる。

小笠原のタマナビーチのような地名(使用例6)以外にも派生語が見られる。例えば、シクンシ科のモモタマナ(学名：*Terminalia catappa*)という木(5)があるが、これがこの木の標準和名にもなっている。小笠原ことばが標準日本語となった珍しい例である。日本時代以前の小笠原では、モモタマナが雌とされ、「シータマナ」と言われ、タマナの方が雄とされ「ヒータマナ」と言われ、呼び分けられていたのである。

## 5. 小笠原に伝わったマリアナ諸島のことば

小笠原諸島が有人島になってからずっとチャモロ語圏(グアム、及びサイパンなどの北マリアナ諸島)との関係が続いている。1830年代に来島したグアム人女性がナサニエル・セーボレーと結婚した。後にセーボレー家の人々が他の欧米系家庭と結婚を繰り返した結果、現在の欧米系のほとんどはこのグアム人女性の血を引いている。1870年代に日本時代に入ってから内地の南洋貿易船の拠点の小笠原であった。第一世界大戦からサイパン、テニアン、ロタが日本の領土となり、小笠原との人的交流にさらに拍車がかかった。戦後、小笠原はマリアナ諸島と同じようにアメリカの支配化にあったので、日本本土よりもそこの関係が深かった。大人は職業訓練など、中高生は教育のためにサイパンやグアムに長期滞在することがあったし、入院するときなどもこれらの島に行くようにしていたのである。こうした長い関係がこんにちの島民が

話すことばに反映されている。

小笠原でササヨと呼ばれている魚 (標準和名ミナミイヌズミ, 学名: *Kyphosus bigibbus*) は欧米系の間では「グイリ-」若しくは「グリ」とも言われている。チャモロ語で *guili* はイヌズミ科全体のことを指すので、それが起源であることは確かである。

チャモロ語に由来する植物名も多数見られる。ヒルガオ科のつる性多年草であるヨウサイ (標準和名, 学名: *Ipomoea aquatica*, 別名: 蕪菜<sup>えんさい</sup>, 朝顔菜<sup>あさがおな</sup>, 水アサガオ, パックブンなど) は特にサイパンの生活経験を有する島民の間では「カンコン」という名で知られている。茎葉が炒め物に使われるこの植物はチャモロ語名で *kankong* となっている。

「シーカンバ」もチャモロ語起源の食用植物名である。標準和名クズイモ (別名: ナシイモ, 学名: *Pachyrhizus erosus*) であるこのつる植物は白くて甘い塊茎<sup>かいかい</sup>ができる。チャモロ語で言う *hikamas* や Philippine の *shicamas* は元々スペイン語の *jicama* に由来する。小笠原のシーカンバはおそらく英語の *cucumber* との混交形によって生まれた。ここで欧米系島民がシーカンバについて語っている2つの発話を『小笠原ことばしゃべる辞典』から紹介しよう (7, 8)。

7. シーカンバってね、土の中から掘ると、こんなね、スイカみたいなこんな瑞々しい果物。果物と言っていいかなんか。シーカンバってとってもおいしかった。だけど、最近は見ただことない。だから、私らがもう本当にまだ小さい小学校時代のときにはシーカンバってあったけど、その後見たことないね。(EW)
8. Yeah, sea cucumber were many, long I was young, kid time. I think they're extinct, no more now, gone. (A plant?) A plant, yeah, running along the ground, and like a sweet potato, round, run around. Tastes like a pear. Not too sweet, but eat, good. Sea cucumber go around the road, all going up the hill. (Makes a vine? ツルが出て?) ツル, ツル, yeah. Sometimes, digging a hole, a very big one coming, white one. (JG)

最後に挙げるチャモロ語の例は、小笠原でギンネム (銀合歓<sup>ぎんねむ</sup>, 学名: *Leucaena leucocephala*) という標準和名で知られている鳥羽のような葉 (羽状複葉) を持つ植物である。一部の島民の間で「タガタガン」がこの名称として通じるが、これは明らかにチャモロ語の *tangantangan* からきている。欧米系島民が次のように語っている (9)。

9. ギンコウカイ、あれは内地のどこにもあって、Guamanian はあれをタガタガンと言いますよ。私らにはタガタガンで通じるけど。(MI)

さて、マリアナ諸島から小笠原に伝ったことばはチャモロ語だけではない。小笠原では伊勢えびのことを「ロングスタ」と呼ぶ人がいる。これはスペイン語 (*longusta*) である。スペインは数百年に渡ってグアムやサイパンなど北西太平洋のほとんどの島々を支配し、そしてスペイン語はチャモロ語に凄まじいほどの影響を与えたのである。小笠原の欧米系の間では英語のロブスタ (*lobster*) も通じるが、戦後世代の話者の間では「ログスタ」という混交形が生まれている。

「ワーファー」は標準和名サワラ (学名: *Scomberomorus niphoniu*) を指すことばで、小笠原で



図4 米軍統治時代の父島にあった野外映画館「ワーファー」

もサイパンでもよく使われている単語である。米軍時代の小笠原には野外映画館があった(図4)。(現在の生協の西側にあったこの映画館は、元々カマボコ兵舎のカバーがついていたが、それが台風吹き飛ばされて、結果的に野外映画館になったのである。)その映画館の名前は「ワーファー」となっていた。それほど米軍統治時代の欧米系島民にとってワーファーが馴染み深い言い方なのである。

なお、wahoo という単語はチャモロ語起源というわけではない(語源辞典を調べると由来が「不明」とあるが、初出は大西洋地域なので、太平洋系の言語ではないようである)。しかし、サイパンへ行くと、wahoo がTシャツの柄となっているほど馴染みの深い魚であると言える(図5)。



図5 サイパンで販売されている wahoo 柄のTシャツ

小笠原で使われている「カナカ」ということばはおそらく入植が始まった1830年当時から使われていた。ハワイで昔から使われているから、サイパンから伝わったとは限らない。しかし、現在ではこの単語を日本語の会話で聞くことができるのは小笠原で話されている日本語とサイパンで話されている日本語の2つだけであるので二つの地域の共通点と言える。カナカは本土の日本語で使われないどころか、まず通じないのである。意味には広義と狭義がある。広い意味では、太平洋諸島民一般を指す総称である。差別的に感じる人もいる。小笠原の使い方を、欧米系島民が以下のように説明している。

10. カナカね。でも本人向かっては言いませんよ。やっぱ、そういう一応日本人が言う場合には軽蔑の意味が入ってるんですよ。(MI)

小笠原では、身体の衛生状態が悪い人のことを非難するときにも、「そんなカナカ人みたいな

ことをするな」のような言い方を用いる。

一方、サイバンは戦前、チャモロ族とカロリン族はひっくるめて「島民」と呼ばれていた（日本語が話せるサイバンの高年層の中には、この言い方をやや差別的に感じる人もいる）。二つの民族を区別するとき、カロリン人の方は「カナカ」と呼ばれていた。現在の北マリアナ諸島においても、日本語の話せる年層のカロリン人は自らのことをカナカと言っている。これには自己嫌悪も皮肉もなく、ただ単に自分たちカロリン民族を意味する日本語の単語としてそれを用いているだけである。ちなみに、この単語はハワイ語の *kanaka*（人間）に由来し、19世紀に太平洋地域で広がり、各地のピジン英語に入ったのである。

## 6. 共通性が見られるネーミング法

小笠原諸島のそれぞれの島名は家族を表わす単語になっている。父島列島には兄島、弟島、孫島があり、北側には<sup>むこ</sup>聾島、<sup>なかうど</sup>媒島、嫁島、南には母島列島の姉島、妹島、姪島がある。こうしたネーミングを考えたのは、1675年当時「辰巳（あるいは巽）無人島」と呼ばれていた小笠原諸島の巡検航海と調査、観測を幕府に命じられた嶋谷市左衛門である。

内地は古来日本語を話す人々が住んでいるので、このような計画性をもって付けられた地名はあまり見当たらないが、旧南洋庁地域には類似する名づけ方法が見られる。西洋人が16世紀に太平洋の島々の所有権を主張し始めてから既に住んでいる人々の呼び名を無視して自分たちに分かりやすい名称を勝手に付けた。南進論を唱えた日本は同じように自分たちにとって使いやすい日本語の地名をミクロネシアの島々につけた。戦前に四季諸島と改名されたのは現在のナモネアス諸島で、春島（ウェノまたはモエン、現在のチューク州の中心地）、夏島（トノアスまたはデュブロン、日本統治時代に飛行場があった中心地）、秋島（フェファン）、冬島（ウマン）があった。七曜諸島（ファイチュック諸島）には、日曜島（ロモヌン）、月曜島（ウドット）、火曜島（ファラベケット）、水曜島（トル島、環礁内で最大の島）、木曜島（パタ）、金曜島（ボレ）、土曜島（オナムエ）があった。これ以外にも、地元の文化では「島」と考えていない外縁部の堡礁にそれぞれ十二支の島名が与えられていた（子島、丑島、寅島、卯島、辰島、巳島、午島、未島、申島、酉島、戌島、亥島）。日本語の地名が既に付いていた内地と違って、小笠原と旧南洋庁の島々ではこうした「シリーズ物」の名づけが可能であった。

## 7. 南洋における言語交流とその類型

以上では小笠原で話されている日本語（主に欧米系島民が話す日本語）と旧南洋庁地域で用いられている日本語、あるいは各地の現地語に取り入れられている日本語起源の借用語をみて、日本本土より南の広大な地域で起きた言語交流を考察した。結果を図6の矢印で示した。まず矢印1番は本土から延びている点線である。これは本稿2節で概説した「小笠原や旧南洋庁に伝わった後、本土で廃れた単語」を現す。2番の線は小笠原とパラオの両方に伝わった八丈島方言の影響を現す。3番はハワイ語から小笠原に伝わった後、パラオ語に入った単語を現す。4番の線はチャモロ語など北マリアナから小笠原に伝わった単語を現す。南の海で起きたこの言語交流には沖縄

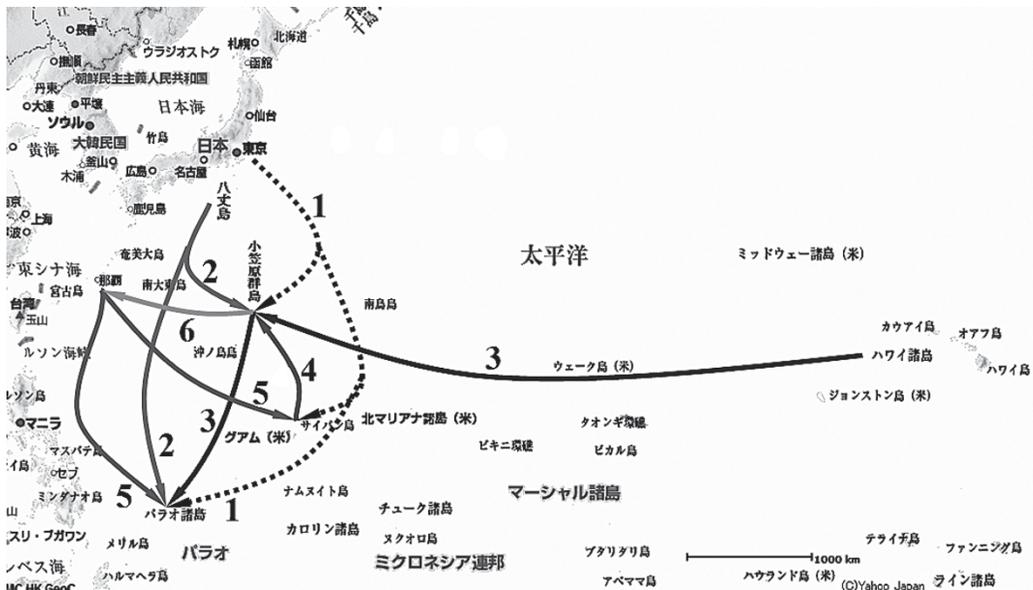


図6 南洋における言語交流の類型

も関わっていた。本稿では紙幅のためにこれを取り上げなかったが、5番は沖縄から北マリアナやパラオに渡った戦前の移民がそれぞれの地域にもたらした言語的影響を現している。最後に、ごく僅かながら、小笠原が沖縄に与えた言語的影響があり（オガサワラバナナ＝キングバナナ、漁サン＝漁業用のサンダル、タマナなど）、それを線6で表した。

これら以外にも小笠原と沖縄など琉球語地域の両方の日本語に見られる複数の共通点がある。「味する」(味見する)のような「名詞＋する」が生産的であることや「あげろうか」(あげようか)のよう一段動の五段化がこれに当る。沖縄から小笠原に渡った人間の数は片手で数えられるほどしかないので、これらの共通点は偶然の一致とも思える。あるいは、偶然でなければ、両方地域で発展した中間言語の影響とも考えられる。すなわち、沖縄では琉球諸語を母語とする人々が日本語を第二言語として習得する段階で中間言語(ウチナーヤマトウグチ)が形成された。一方、小笠原ではクレオロイド英語を母語とする欧米系島民が第二言語として日本語を習得した結果、彼らの日本語にも中間言語的なところが見られる。すなわち、小笠原と沖縄における共通点の可能性は(1)小笠原が沖縄に影響を与えたこと、(2)沖縄が小笠原に影響を与えたこと、(3)まったくの偶然の一致、の3つ以外にも、(4)独自の発展を遂げたものの、同じ中間言語という過程を経た。自然界の進化に例えるなら、鯨類は魚ではないが、似たような環境におかれたため似て来た状況と似ているのである。沖縄との関係に関する議論は稿を改めて考察したいと思う。

#### 参考文献

- 井上史雄 (1999) 『敬語はこわくない』 講談社  
 真田信治 (2009) 『越境した日本語』 和泉選書

- 高橋顕志（1985）「廃物廃語と無回答（NR）」『国語学』143：64-53
- ロング，ダニエル（2000）「小笠原諸島の言語と文化にみられる太平洋諸島の影響」『20世紀フィールド言語学の軌跡 徳川宗賢先生追悼論文集』79-96 変異理論研究会
- ロング，ダニエル・橋本直幸（2005）『小笠原ことばしゃべる辞典』南方新社
- Friday, J. B. & Dana Okano（2006）“*Calophyllum inophyllum* (kamani)” *Species Profiles for Pacific Island Agroforestry* vol. 2.1:1-17 online at: <http://www.agroforestry.net/>
- Trudgill, Peter（2004）“Colonial Lag and Southern Hemisphere Evidence for 19<sup>th</sup> Century British English” *New Dialect Formation: The Inevitability of Colonial Englishes*. Oxford University Press.

## 謝辞

本稿の研究は、人間文化研究機構国立国語研究所共同プロジェクト『日本語変種とクレオール形成過程』（真田信治研究代表者）、および科学研究費『日本の複数の多言語コミュニティを比較する言語習得・言語接触の調査研究』（基盤研究 C、課題番号 21520544、ダニエル・ロング研究代表者）の助成を受けて行われたものである。

